福岡県立大学心理臨床研究，９巻，2017，13-26　　［研究論文］

中学生の家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連
－会話の内容及び家族からの一貫した関わりに着目して－

小野田　瑠璃*　・　吉岡　和子**

本研究では，中学生422名を対象に質問紙調査を行い，家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連について，会話の内容及び家族からの一貫した関わりに着目して検討した。

家庭における居場所感と会話の内容について，「雑談・体験の共有」が，「家での休息感」「家族に対する居場所感」の両方と関連が示された。また，「プライベートな内容」，「近況報告」，「趣味」は，「家での休息感」との関連が示されたが，「進路相談」は，「家での休息感」，「家族に対する居場所感」のどちらとも関連は示されなかった。家庭における居場所感と家族からの一貫した関わりについて，「あいさつをする」「様子を気にかける」は，「家での休息感」「家族に対する居場所感」の両方と関連が示された。「一緒に食事をする」は「家族に対する居場所感」，「話しかける」は「家での休息感」との関連がみられた。

以上の結果から，家族とのコミュニケーションが減少する思春期においても，コミュニケーションのあり方によって，中学生の家庭における居場所感を高めることが可能であることが示唆された。

キーワード：　中学生・居場所・家族・コミュニケーション

問題及び目的

１．家庭における居場所感

現在，子どもたちの「居場所づくり」の重要性が様々な場面で指摘されている。それは，不登校やひきこもり，いじめ，非行や少年犯罪など，子どもに関する様々な問題が起こり，時代による社会状況や，家族形態の変化に伴って，子どもたちを取りまく環境も変化していることが，少なからず子どもたちにストレスを与えているからである。特に，思春期・青年期は，心理的離乳や自我同一性の確立という発達課題に直面する子どもから大人への移行期であることから，その時期の子どもは，とても不安定な心理状態にある。このような不安定な時期に子どもの「居場所」を保証することの必要性が強調されてきた（青木，1996；富永・北山，2001；佐治・岡村・加藤・八巻，1995）。

しかしながら，「居場所」に関する各々の研究において，「居場所」に関する定義は多義かつ曖昧であり，明確な定義はされていない（則定，2008）。「居場所」という言葉の本来の意味は「人がいる場所」という物理的な意味であるが，村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤（2000）は，「居場所」を「心の拠り所となる物理的な空間や対人関係，もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファーである」と定義しており，ある空間や時間，対人関係で体験する特別な感情を「居場所」の概念として重視している。このように，「居場所」という言葉は，今や物理的な場所のみを指し示すにとどまらず，その場における人のあり方や感覚などを含む概念として，物理的側面と心理的側面の両方を合わせ持つものと理解されている（中島，2003；中村，1998a，1998b，1999）。特に，則定（2008）は「居場所」の中でもその心理的な側面に着目し，物理的居場所の有無とは区別して考えることを明示するため「心理的居場所」という言葉を用い，「心理的居場所感」を「心の拠り所となる関係性，および安心感があり，ありのままの自分を受容される場があるという感情」と定義した。本研究でも「居場所」

*福岡県立大学大学院心理教育相談室　相談員
**福岡県立大学大学院　人間社会学研究科　心理臨床専攻　准教授

の心理的な側面に注目し，「自分の居場所がある」という感情，さらに「居場所」を思い浮かべた時の感情を「居場所感」とする。

「居場所」の中でも，家庭における「居場所」は，思春期の子どもにとって重要な意味を持つ。杉本・庄司（2006）は，「家族のいる居場所」が様々な機能を備えた安定した「居場所」であることを明らかにした。児童期には「家族のいる居場所」を持てることによって心理的安定の基礎となると考え，さらに，思春期を迎えた子どもは，親からの精神的な自立に伴い，１つですべてを満たしてくれる安定した「家族のいる居場所」から離れ，それに代わる「居場所」を求めるようになっていくとしている。しかし，佐治ら（1995）は，思春期・青年期の心理的離乳にあたり，いつでも戻って来られる心理的基地が必要であるとし，この時期に子どもが親に対して心を閉ざすことがあっても，庇護してもらえる自分の居場所としての家庭を心の中に必要としていることを指摘している。同様に，富永・北山（2003）も，心理的離乳に伴い，家庭，家族における「居場所」が危機的な状態になったとしても，家庭は重要な「居場所」であり続けることが指摘している。このように，家庭は子どもにとって主要な居場所でなくなったとしても，帰りたい時に帰れる場所として必要とされる拠点である。そこで，「帰りたい時に帰ることができる居場所があるという感覚」を「いつでも帰れる感覚」に関する尺度（小野田・吉岡，2014）で捉える。本研究では，「家庭における居場所感」を「青年版心理的居場所感尺度」（則定，2008）を家族に限定した質問項目にして，「いつでも帰れる感覚」に関する尺度（小野田ら，2014）と併せて新たに「家庭における居場所感」尺度を作成する。また，「家庭における居場所感」を捉える時に，家族をどう定義するかが重要となるが，近年，家族は外見上・法律上の形式で一様に定義することは難しく，家族とは「自分たちが家族と了解した人々のこと」といってもよいほど多様化し，変貌している（平木・中釜，2006）ことから，子どもが家族だと思う人との関係が「家庭における居場所感」にとって重要であると考え，本研究での家族は，「家族と聞いて思い浮かぶ人」とする。

２．家庭における居場所感と家族とのコミュニケーション

中学生では，小学生に比べて親子間のコミュニケーションは減少する傾向があり，親とのコミュニケーション欲求も減少することが明らかにされている（田中，2003）。子どもが家族に反抗的な態度やそっけない態度をとることも増えてくるため，子どもに対してどのように関わればいいのか親も悩む時期である。しかし，親子のコミュニケーションが減少する時期に家族がどのように子どもと関わるかが，思春期において良好な家族関係を保ち，子どもの家庭における居場所感を高めるために重要であるだろう。

住田（2003）は親とのコミュニケーション頻度によって家庭における「居場所」のタイプが異なることを明らかにした。その結果，親とのコミュニケーションの頻度が高い場合に，子どもは親との関係性の中に楽しみや安らぎ，くつろぎを感じて［家族 - 居間型］の居場所を形成するが，親とのコミュニケーション頻度が低い場合には，その関係性を友達に向け，［友達―居間］型，［友達―自室］型の居場所を形成しようとすることが示唆された。また，子どもが判断する親の理解度についても，コミュニケーションの頻度の場合と類似的な傾向が見られ，子どもにとっては，親とのコミュニケーション頻度＝親の理解度であると考察している。このことから，家族とのコミュニケーションの量は，「家庭における居場所感」と関連していると考えられる。しかし，コミュニケーションのあり方が家庭における居場所感とどのように関係しているのかについての研究は行われていない。思春期になると家族とのコミュニケーションが減少するからこそ，コミュニケーションの質が重要になるだろう。そこで，本研究では，家族との会話の内容，家族からの一貫した関わりに焦点をあてる。

まず，会話の内容には，子どもが安心するものとそうでないものがあり，家族間で行われる会話の内容によって，家庭における居場所感は異なってくる。例えば，友だちとのエピソードや，自分の興味・関心のあるものについて家族と話すことは，子どもにとって居心地がよく，居場所感は高まるのではないだろうか。また，悩みや不安など，自分が抱えている気持ちを簡単に人には話せない話を家族に対して話すことができると，本来感や被受容感は高まり，居場所感は高くなり，一方，勉強や成績の話，進路の話は，子どもにとってプレッシャーになり，居場所感を高めることには影響しないのではないだろうか。また，子どもがそっけない態度や反抗的な態度をとったとしても，子どもが抱いている自立と依存の葛藤や自立への不安を理解し，家族は積極的に関心を示し，見守り続けることが大切なのではないだろうか。そのようにして子どもが困った時にいつでも頼れる関係を家族との間に作って

おくことが，子どもの家庭における居場所感につながると考えられる。

そこで，本研究では，「家族が積極的に関心を示し，見守り続けること」を「家族からの一貫した関わり」とし,「一緒に食事をする」「話しかける」「挨拶をする」「様子を気にかける」という４点から検討する。

一緒に食事をすることは，一緒に過ごす時間の確保となる。会話の有無に関わらず，家族と一緒に過ごす時間があることで，子どもは自分が家族の一員であることを実感し，安心するのではないだろうか。また，子どもに話しかけることは，家族から子どもに歩み寄ることである。自立と依存の葛藤から，そっけない態度をとってしまう子どもにとって，自分がそっけない態度をとっても家族が変わらずに話しかけてくれることで，子どもはどんな態度をとっても見捨てられないと安心し，居場所感につながるのではないだろうか。さらに，あいさつは家族が子どもの存在を認める重要なコミュニケーションであり，会話量が減少してもあいさつを交わすことで，家族が子どもの存在を受容していることを伝えることができ，子どもの「自分はここにいてもいい」という感覚につながるのではないだろうか。最後に，家族が積極的に子どもの行動や調子など，様子を気にかけることは，家族が子どもに対して関心を持っていることを示すコミュニケーションである。家族から関心を向けてもらえることで，子どもが家族から見守られていることや家族からの愛情を実感し，居場所感を感じるのではないだろうか。このように,「一緒に食事をする」「話しかける」「挨拶をする」「様子を気にかける」ことは，いずれも子どもに家族とのつながりを感じさせるものであり，このような家族からの関わりによって，子どもは家庭から離れようとしても，自分の「居場所」は変わらずあり続けること,「いつでも帰れる場所」があることを実感できると考えられる。したがって，家族からの一貫した関わりがある子どもは，離れていても家族は変わらず自分のことを愛してくれる，自分の居場所はなくならないという安心感や必要な時にはいつでも助けてくれるという信頼感をもつことができるため,「家庭における居場所感」が高まると予想される。

以上をふまえて，本研究では，思春期が始まり最も不安定であるとされる中学生を対象として，家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションとの関連について検討することを目的とし，以下の仮説について検証する。

仮説１．家族間で行われる会話の内容によって，家庭における居場所感の程度は異なる。

(1)友達とのエピソードや自分の興味・関心があるものについて家族と話す子どもは家庭における居場所感が高い。

(2)悩みや不安など，自分が抱えている気持ちを家族に話している子どもは，家庭における居場所感が高い。

仮説２．家族からの一貫した関わりがある子どもは，家庭における居場所感が高い。

方　法

１．調査対象・調査時期

福岡県内の中学１，２，３年生422名（男子231名，女子190名，不明１名）を対象に，2014年９月に実施した。

２．調査手続き

教諭が対応しやすいようマニュアルを作成し，事前に教示等の打合せを行った。学級ごとに家庭科の授業の時間内に教諭の教示のもと実施,回収してもらった。回答にあたっては，データは統計的に処理され個人の情報は特定されないこと，回答したくない時や回答しづらい質問には回答しなくてもよいことが紙面上及び口頭で教示された。また，質問紙の最初には「このアンケートでは，家族と聞いてあなたが思い浮かべた人について答えてください。」と記述した。

３．調査内容

１）基本情報：性別と学年を尋ねた。

２）家庭における居場所感に関する項目

家庭における居場所感について,「青年版心理的居場所感尺度」(則定，2008)のうち「本来感」,「被受容感」,「安心感」に関する14項目と「いつでも帰れる感覚」に関する尺度（小野田・吉岡，2014）の「休息感」「家族への信頼感」に関する９項目を合わせて使用した（Table 1)。「青年版心理的居場所感尺度」の14項目については，項目の○○の部分を「家族」とした。計23項目について，「まったくそう思わない」を１点，「とてもそう思う」を５点とし，５件法で評定を求めた。

Table 1　家庭における居場所感に関する項目

	項　目
休息感	家に帰るとほっとする。 しんどい時は家に帰りたいと思う。 家は自分にとって休息の場である。
家族への信頼感	いざという時，家族は自分を助けてくれると思う。 家族とのつながりは大切だと思う。 家族と離れていてもつながっていると感じる。 何かうまくいかない時に家に帰ると安心する。 家族を思い浮かべると，頑張ろうと思う。 家族と話したい時，家族は話を聞いてくれる。
本来感	家族と一緒にいると，ありのままの自分を表現できる。 家族と一緒にいると，ありのままの自分でいいのだと感じる。 家族と一緒にいると，自分らしくいられる。 家族と一緒にいると，心から泣いたり笑ったりできる。
被受容感	家族に無条件に愛されている。 家族は，私を大切にしてくれる。 家族に無条件に受けいれられている。 家族は，いつでも私を受けいれてくれる。 家族と一緒にいるとここにいていいのだと感じる。 家族に必要とされている。
安心感	家族と一緒にいるとほっとする。 家族と一緒にいると安心する。 家族と一緒にいると，居心地がいい。 家族と一緒にいるとくつろげる。

3）家族との会話量

「家族と話す」という問いについて，「1．まったくない」「2．ほとんどない」「3．時々ある」「4．よくある」の4件法で回答を求めた。

4）家族からの一貫した関わりに関する項目

家族からの一貫した関わりを「一緒に食事をする」「話しかける」「あいさつをする」「様子を気にかける」として考え，それぞれ項目を作成した（Table 2）。

「一緒に食事をする」「話しかける」の項目については各1項目で，「1．まったくない」「2．ほとんどない」「3．時々ある」「4．よくある」の4件法で回答を求めた。

「あいさつをする」「様子を気にかける」の項目については各5項目を作成し，「1．あてはまらない」「2．あまりあてはまらない」「3．少しあてはまる」「4．あてはまる」の4件法で回答を求めた。

Table 2　家族からの一貫した関わりに関する項目

	項　目
一緒に食事をする	家族と一緒に食事をする。
話しかけられる	家族から話しかけられる。
あいさつをする	朝起きた時，家族は必ずおはようと言ってくれる。 夜寝る時，家族は必ずおやすみと言ってくれる。 あなたが出かける時，家族は必ずいってらっしゃいと言ってくれる。 あなたが家に帰った時，家族は必ずおかえりと言ってくれる。 あなたが家族に挨拶をした時，家族は必ず返してくれる。
様子を気にかける	あなたが家族のために何かをした時，家族は必ずありがとうと言ってくれる。 あなたの帰りが遅くなった時，家族は必ず心配してくれる。 あなたが落ち込んでいる時，家族は必ず気づいてくれる。 あなたががんばろうと思った時，家族は必ず応援してくれる。 あなたにいいことがあった時，家族は必ず喜んでくれる。

Table 3　家族との会話の内容に関する項目

項　　目
今日の予定について家族と話す。
今日体験したことについて家族と話す。
明日，何をする予定かについて家族と話す。
今後２，３週間の予定について家族と話す。
今，興味を持っていること（もの）について家族と話す。
今，夢中になっていること（もの）について家族と話す。
最近，楽しかった（うれしかった）出来事について家族と話す。
最近，悲しかった（腹が立った）出来事について家族と話す。
最近の楽しみについて家族と話す。
最近の悩みや不安について家族と話す。
自分の性格に関することについて家族と話す。
自分の容姿に関することについて家族と話す。
自分の体調のことについて家族と話す。
自分の趣味や好き嫌いについて家族と話す。
自分の目標について家族と話す。
自分の願望について家族と話す。
家族内で話題になったことについて家族と話す。
家族内であった出来事について家族と話す。
家族について思ったことや感じたことを家族と話す。
学校であった出来事について家族と話す。
友だちのことについて家族と話す。
勉強のことについて家族と話す。
恋愛のことについて家族と話す。
部活のことについて家族と話す。
将来の夢について家族と話す。
進学や就職のことについて家族と話す。
どんな大人になりたいか，あるいは家族は自分にどんな大人になってほしいかについて家族と話す。
TVやニュースで見た（聞いた）ことについて家族と話す。
ファッションや流行に関することについて家族と話す。
たわいもない話について家族と話す。

５）家族との会話の内容に関する項目

家族との会話の内容について，日常コミュニケーション尺度（多川・吉田，2006）の「日常的報告」の項目を参考に，30項目を作成した（Table 3）。それらの項目について，「１．まったくない」「２．ほとんどない」「３．時々ある」「４．よくある」の４件法で回答を求めた。

結　果

得られた回答のうち，基本情報以外の項目がすべて無回答のものを除き，中学生417名（男子228名，女子188名，不明１名）を分析対象とした。さらに，それぞれの分析ごとに変数となる尺度に無回答の項目があるものは分析対象から除外した。

１．尺度の検討

１）家庭における居場所感に関する項目について

家庭における居場所感に関する尺度23項目に対して因子分析を行ったところ，固有値から２因子解が適当と判断した。最終的に，重みなし最小二乗法・プロマックス回転による結果を採用した。その結果をTable 4に示す。２因子による累積説明率は69.34％であった。

第Ⅰ因子は家族と一緒にいる時に感じる安心感や被受容感，ありのままでいられる感覚，家族への信頼感など，家族とのつながりを重視した項目で構成されていることから，「家族に対する居場所感」と命名した。第Ⅱ因子は休息の場として家という空間が重視されている項目で構成されていることから「家での休息感」と命名した。

各因子の信頼性の値は，それぞれα＝.976，α＝.893であった。

Table 4　家庭における居場所感に関する項目の因子分析結果

質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性
Ⅰ．家族に対する居場所感（α＝.976）			
17. 家族は，いつでも私を受けいれてくれる。	**.943**	－.072	.789
14. 家族に無条件に愛されている。	**.886**	－.078	.684
16. 家族に無条件に受けいれられている。	**.884**	－.122	.630
18. 家族と一緒にいるとここにいていいのだと感じる。	**.860**	.042	.797
10. 家族と一緒にいると，ありのままの自分を表現できる。	**.839**	－.055	.636
15. 家族は，私を大切にしてくれる。	**.839**	－.026	.670
12. 家族と一緒にいると，自分らしくいられる。	**.836**	－.020	.673
11. 家族と一緒にいると，ありのままの自分でいいのだと感じる。	**.834**	－.011	.681
9．家族と話したい時，家族は話を聞いてくれる。	**.791**	.031	.665
13. 家族と一緒にいると，心から泣いたり笑ったりできる。	**.770**	.049	.653
19. 家族に必要とされている。	**.737**	.090	.654
5．家族とのつながりは大切だと思う。	**.640**	.143	.571
22. 家族と一緒にいると，居心地がいい。	**.627**	.341	.839
20. 家族と一緒にいるとほっとする。	**.623**	.346	.839
6．家族と離れていてもつながっていると感じる。	**.609**	.214	.617
4．いざという時，家族は自分を助けてくれると思う。	**.600**	.266	.676
21. 家族と一緒にいると安心する。	**.572**	.399	.837
23. 家族と一緒にいるとくつろげる。	**.522**	.399	.753
8．家族を思い浮かべると，頑張ろうと思う。	**.517**	.278	.566
Ⅱ．家での休息感（α＝.893）			
3．家は自分にとって休息の場である。	－.163	**.917**	.638
2．しんどい時は家に帰りたいと思う。	－.121	**.903**	.662
1．家に帰るとほっとする。	－.009	**.845**	.702
7．何かうまくいかない時に家に帰ると安心する。	.197	**.683**	.712

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	1.000	.770
Ⅱ		1.000

2）会話の内容に関する項目について

会話の内容に関する項目30項目に対して因子分析を行ったところ，固有値から５因子解を採用し，因子負荷量が.40に満たない４項目を削除し，再度因子分析を行った。最終的な因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）をTable 5に示す。５因子による累積説明率は59.60％であった。

第Ⅰ因子は容姿や性格，体調，悩みや不安，悲しみ，家族への思いや恋愛といった，より内的な感情に関する項目で構成されていることから，「プライベート」と命名した。第Ⅱ因子は学校や家庭での出来事に関することや友だちのこと，TVやニュースの話やたわいもない話といった身の回りでの出来事や雑談の内容で構成されていることから，「雑談・体験の共有」と命名した。第Ⅲ因子は，将来の夢や目標など，進路に関する項目で構成されていることから，「進路相談」と命名した。第Ⅳ因子は，今日や明日の予定，今日体験したことなど，報告的な内容の項目で構成されていることから「近況報告」と命名した。第Ⅴ因子は，興味や関心，楽しみや好き嫌いなどの項目で構成されていることから，「趣味」と命名した。各因子の信頼性の値は，それぞれα＝.868，α＝.871，α＝.864，α＝.854，α＝.892であった。

3）家族からの一貫した関わりに関する項目について

家族からの一貫した関わりに関する項目のうち，「あいさつをする」項目と「様子を気にかける」項目の10項目について因子分析を行ったところ，固有値から２因子解を採用した。最終的な結果（主因子法・プロマックス回転）をTable 6に示す。２因子の累積寄与率は57.84％であった。

第Ⅰ因子は尺度作成時に「様子を気にかける」の項目として仮定した５項目であったため，因子名は「様子を気にかける」とした。第Ⅱ因子は尺度作成時に「あいさつをする」の項目として仮定した５項目であったため，因子名は「あいさつをする」とした。

各因子の信頼性の値は，それぞれα＝.867，α＝.854であった。

Table 5　会話の内容に関する項目の因子分析結果

質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
Ⅰ．プライベート（α＝.868）						
12. 自分の容姿に関することについて家族と話す。	**.890**	−.041	.130	−.062	−.100	.692
11. 自分の性格に関することについて家族と話す。	**.851**	.079	.023	−.095	−.053	.671
10. 最近の悩みや不安について家族と話す。	**.763**	−.059	−.033	−.047	.102	.552
８．最近，悲しかった（腹が立った）出来事について家族と話す。	**.643**	.022	−.144	.070	.138	.542
19. 家族について思ったことや感じたことを家族と話す。	**.473**	.328	.081	−.029	−.039	.568
13. 自分の体調のことについて家族と話す。	**.466**	−.096	.121	.183	.105	.500
23. 恋愛のことについて家族と話す。	**.439**	.129	.107	−.031	−.271	.177
Ⅱ．雑談・体験の共有（α＝.871）						
17. 家族内で話題になったことについて家族と話す。	−.021	**.779**	.107	−.060	.028	.655
18. 家族内であった出来事について家族と話す。	.110	**.741**	.005	−.103	.064	.652
28. TVやニュースで見た（聞いた）ことについて家族と話す。	−.079	**.630**	.049	−.004	.099	.448
30. たわいもない話について家族と話す。	−.027	**.601**	.031	.053	.064	.467
20. 学校であった出来事について家族と話す。	.283	**.467**	−.127	.247	−.064	.605
21. 友だちのことについて家族と話す。	.150	**.414**	−.048	.254	−.006	.499
Ⅲ．進路相談（α＝.864）						
26. 進学や就職のことについて家族と話す。	−.068	.005	**.827**	.087	−.117	.592
25. 将来の夢について家族と話す。	−.049	.119	**.746**	−.022	.044	.646
27. どんな大人になりたいか，あるいは家族は自分にどんな大人になってほしいかについて家族と話す。	.223	−.086	**.660**	.034	−.027	.590
15. 自分の目標について家族と話す。	.097	−.037	**.533**	.049	.207	.571
16. 自分の願望について家族と話す。	.051	.271	**.473**	.009	.056	.567
Ⅳ．近況報告（α＝.854）						
３．明日，何をする予定かについて家族と話す。	−.111	−.068	.081	**.949**	−.009	.746
１．今日の予定について家族と話す。	−.115	.108	.072	**.852**	−.124	.641
４．今後２，３週間の予定について家族と話す。	.191	−.201	.069	**.531**	.202	.556
２．今日体験したことについて家族と話す。	.110	.321	−.125	**.499**	.030	.635
Ⅴ　趣味（α＝.892）						
６．今，夢中になっていること（もの）について家族と話す。	−.124	.065	−.013	−.040	**.964**	.785
５．今，興味を持っていること（もの）について家族と話す。	−.116	.108	−.001	−.029	**.916**	.790
９．最近の楽しみについて家族と話す。	.317	.096	−.131	.175	**.422**	.689
14. 自分の趣味や好き嫌いについて家族と話す。	.198	.072	.243	−.007	**.420**	.660

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ	1.000	.745	.635	.728	.749
Ⅱ		1.000	.577	.671	.702
Ⅲ			1.000	.515	.582
Ⅳ				1.000	.692
Ⅴ					1.000

削除した項目(因子寄与率が．40以下の項目)
７．最近，楽しかった（うれしかった）出来事について家族と話す。
22. 勉強のことについて家族と話す。
24. 部活のことについて家族と話す。
29. ファッションや流行に関することについて家族と話す。

Table 6　家族からの一貫した関わりに関する項目の因子分析結果

質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性
Ⅰ：様子を気にかける（α＝.867）			
13. あなたにいいことがあった時，家族は必ず喜んでくれる。	**.930**	−.118	.735
12. あなたががんばろうと思った時，家族は必ず応援してくれる。	**.785**	−.031	.585
11. あなたが落ち込んでいる時，家族は必ず気づいてくれる。	**.729**	−.001	.530
10. あなたの帰りが遅くなった時，家族は必ず心配してくれる。	**.588**	.096	.429
９．あなたが家族のために何かをした時，家族は必ずありがとうと言ってくれる。	**.495**	.317	.552
Ⅱ：あいさつをする（α＝.854）			
５．夜寝る時，家族は必ずおやすみと言ってくれる。	−.087	**.878**	.678
４．朝起きた時，家族は必ずおはようと言ってくれる。	−.105	**.832**	.588
６．あなたが出かける時，家族は必ずいってらっしゃいと言ってくれる。	.051	**.731**	.586
７．あなたが家に帰った時，家族は必ずおかえりと言ってくれる。	.159	**.653**	.589
８．あなたが家族に挨拶をした時，家族は必ず返してくれる。	.337	**.448**	.512

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	1.000	.657
Ⅱ		1.000

２．会話の内容と家庭における居場所感との関連について

会話の内容に関する項目について，因子ごとに合計得点を算出し，合計得点の平均値以上を「あり」群，平均値以下を「なし」群とした。

会話量は，「家族と話す」に「４．よくある」と回答した者を会話量「多」群，「１．まったくない」～「３．時々ある」と回答した者を会話量「少」群とした。

１）家での休息感

(1)性別と会話の内容を要因とした２要因分散分析

家での休息感について，性別（男・女）と会話の内容（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析（被験者間）を行った。その結果をTable 7-1に示す。

性別と「雑談・体験の共有」の交互作用が有意であり（F(1, 404)＝4.56，p＜.05），性別と「趣味」の交互作用は有意傾向であった（F(1, 405)＝2.88，p＜.10）。単純主効果の検定の結果，「雑談・体験の共有」のなし群では男子の方が女子より家での休息感が低い傾向が見られ（p＜.10），男子では「雑談・体験の共有」のあり群の方がなし群より家での休息感が有意に高かった（p＜.01）。また，「趣味」のなし群では男子の方が女子より家での休息感が低い傾向が見られ（p＜.10），男子では「趣味」のあり群の方がなし群より家での休息感が有意に高かった（p＜.05）。

性別の主効果は見られなかった。

会話の内容の主効果については，「プライベート」「雑談・体験の共有」「近況報告」の主効果が有意傾向であり（それぞれF(1, 407)=3.70, p＜.10；F(1, 404)＝3.44, p＜.10；F(1, 409)＝3.44，p＜.10），どの内容もあり群の方がなし群より家での休息感が有意に高い傾向であった。

(2)会話量と会話の内容を要因とした２要因分散分析

家での休息感について，会話量（多・少）と会話の内容（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 7-2に示す。

交互作用，会話量の主効果はどの内容においても見られなかった。

会話の内容の主効果については「雑談・体験の共有」の主効果が有意であり（F(1, 405)＝7.52, p＜.01），「雑談・体験の共有」のあり群の方がなし群より家での休息感が有意に高かった。「近況報告」と「趣味」の主効果が有意傾向であった（それぞれF(1, 410)＝3.27, p＜.10；F(1, 406)＝2.91，p＜.10）。「近況報告」のあり群と「趣味」のあり群はどちらもなし群に比べて家での休息感が高い傾向であった。

２）家族に対する居場所感

(1)性別と会話の内容を要因とした２要因分散分析

家族に対する居場所感について，性別（男・女）と会話の内容（あり・なし）を要因とした２×２の２要

Table 7-1　性別と会話の内容別の家での休息感の平均値と２要因分散分析結果

		男				女				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
会話の内容	プライベート	16.10 (4.04)	84	15.13 (4.48)	141	16.28 (4.10)	115	15.59 (4.02)	71	.57,	3.70+,	.11
	雑談・体験の共有	16.56 (3.71)	94	14.73 (4.64)	128	15.94 (4.19)	140	16.07 (4.02)	46	.59,	3.44+,	4.56*
	進路相談	16.08 (4.18)	99	15.03 (4.42)	126	15.87 (4.36)	104	16.08 (3.83)	83	.98,	.97,	2.26
	近況報告	15.97 (3.99)	99	15.12 (4.56)	127	16.20 (3.95)	130	15.42 (4.49)	57	.37,	3.44+,	.01
	趣味	16.17 (3.91)	109	14.78 (4.64)	114	15.95 (4.20)	129	16.05 (4.01)	57	1.43,	2.11,	2.88+

数値は家での休息感の平均値（SD）を示す
F値は，性別，会話内容，交互作用の順に示す
+p＜.10 *p＜.05 **p＜.01 ***p＜.001

Table 7-2　会話量と会話の内容別の家での休息感の平均値と２要因分散分析結果

		会話量（多）				会話量（少）				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
会話の内容	プライベート	16.26 (4.13)	178	15.25 (4.20)	138	15.67 (3.51)	21	15.19 (4.73)	75	.33,	1.67,	.21
	雑談・体験の共有	16.10 (4.08)	218	15.15 (4.55)	94	17.44 (2.68)	16	14.88 (4.63)	81	.70,	7.52**,	1.59
	進路相談	15.97 (4.35)	184	15.54 (4.03)	133	15.95 (3.49)	19	15.14 (4.70)	77	.13,	1.06,	.10
	近況報告	16.01 (4.13)	205	15.38 (4.36)	112	16.32 (3.17)	25	14.94 (4.79)	72	.02,	3.27+,	.45
	趣味	16.04 (4.16)	214	15.27 (4.36)	100	16.13 (3.14)	24	14.96 (4.80)	72	.04,	2.91+,	.12

数値は家での休息感の平均値（SD）を示す
F値は，会話量，会話内容，交互作用の順に示す
+p＜.10 *p＜.05 **p＜.01 ***p＜.001

Table 8-1　性別と会話の内容別の家族に対する居場所感の平均値と２要因分散分析結果

		男				女				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
会話の内容	プライベート	71.04（18.74）	81	66.14（19.07）	138	73.43（19.90）	110	73.57（16.61）	70	6.33**,	1.48,	1.67
	雑談・体験の共有	73.22（17.87）	95	64.04（19.17）	121	73.21（19.75）	134	73.15（16.77）	46	4.88*,	5.03*,	4.90*
	進路相談	70.34（19.89）	97	65.95（18.21）	122	72.67（20.15）	100	73.89（17.43）	81	7.17**,	.68,	2.14
	近況報告	69.68（19.21）	98	66.50（18.82）	122	74.24（18.54）	124	70.98（19.76）	57	5.16*,	2.62,	.00
	趣味	70.27（19.48）	108	65.38（18.53）	109	73.11（19.85）	124	73.57（17.09）	56	7.60**,	1.23,	1.79

数値は家族に対する居場所感の平均値（SD）を示す
F値は，性別，会話内容，交互作用の順に示す
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

因分散分析を行った。その結果をTable 8-1に示す。
性別と「雑談・体験の共有」の交互作用が有意であり（F(1,392)＝4.90, p<.05），単純主効果の検定の結果，「雑談・体験の共有」のなし群では男子の方が女子よりも家族に対する居場所感が低く（p<.01），男子では「雑談・体験の共有」のあり群の方がなし群より家族に対する居場所感が有意に高かった（p<.001）。

どの会話の内容においても，性別の主効果は有意であり（それぞれF(1,395)＝6.33，p<.01；F(1,392)＝4.88, p<.05；F(1,396)＝7.17，p<.01；F(1,397)＝5.16，p<.05；F(1,393)＝7.60，p<.01），女子の方が男子より家族に対する居場所感が高かった。
会話の内容の主効果については，「雑談・体験の共有」の主効果が有意であり（F(1,392)＝5.03，p<.05），あり群の方がなし群より家族に対する居場所感が有意に高かった。

(2)会話量と会話の内容を要因とした２要因分散分析

家族に対する居場所感について，会話量（多・少）と会話の内容（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 8-2に示す。

交互作用，会話量の主効果はどの内容においても見られなかった。

会話内容の主効果については，「雑談・体験の共有」の主効果が有意であり（F(1,393)＝5.84，p<.05），あり群の方がなし群より家族に対する居場所感が有意に高かった。

４．家族からの一貫した関わりと家庭における居場所感との関連について

家族からの一貫した関わりに関する項目について，「一緒に食事をする」「話しかける」においては「４．よくある」と回答したものを「あり」群，「１．まったくない」～「３．時々ある」と回答したものを「なし」群とした。また，「あいさつをする」「様子を気にかける」においては，それぞれ合計得点を算出し，16点以上（１項目以上「４．よくある」と回答したもの）を「あり群」，15点以下を「なし群」とした。

１）家での休息感

(1)性別と家族からの一貫した関わりを要因とした２要因分散分析

家での休息感について，性別（男・女）と家族からの一貫した関わり（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 9-1に示す。

「話しかける」で交互作用が有意傾向でみられた（F(1,407)＝2.87, p<.10）。単純主効果の検定の結果，「話しかける」のなし群では，男子の方が女子よりも家での休息感が低い傾向であり(p<.10)，男子では「話

Table 8-2　会話量と会話の内容別の家族に対する居場所感の平均値と２要因分散分析結果

		会話量（多）				会話量（少）				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
会話の内容	プライベート	72.89（19.31）	174	68.38（19.02）	134	67.59（20.26）	17	68.64（18.21）	75	.82,	.39,	1.00
	雑談・体験の共有	73.17（18.96）	214	65.53（19.87）	90	73.87（19.49）	15	67.31（18.13）	78	.18,	5.84*,	.03
	進路相談	71.93（20.07）	179	69.18（18.47）	130	67.44（19.48）	18	68.53（18.39）	74	.87,	.09,	.48
	近況報告	72.32（19.20）	200	67.94（19.62）	109	69.78（18.08）	23	67.90（18.62）	70	.25,	1.48,	.24
	趣味	72.18（19.64）	209	67.69（18.98）	97	68.26（20.18）	23	68.32（18.06）	69	.40,	.73,	.76

数値は家族に対する居場所感の平均値（SD）を示す
F値は，会話量，会話内容，交互作用の順に示す
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

しかける」のあり群がなし群に比べて家での休息感が有意に高かった（p<.05）。

性別の主効果は，「話しかける」において有意傾向であり（F(1, 407)＝2.78，p<.10），女子の方が男子より家での休息感が高い傾向であった。

家族からの一貫した関わりの主効果については，「あいさつをする」において有意傾向であり（F(1, 406)＝3.10，p<.10），あり群の方がなし群より家での休息感が高い傾向であった。

(2)会話量と家族からの一貫した関わりを要因とした２要因分散分析

家での休息感について，会話量（多・少）と家族からの一貫した関わり（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 9-2に示す。

交互作用，会話量の主効果はどの内容においても見られなかった。

家族からの一貫した関わりの主効果については，「あいさつをする」と「様子を気にかける」で有意傾向であり（それぞれF(1, 407)＝3.80，p<.10；F(1, 408)＝3.12，p<.10），「あいさつをする」のあり群と「様子を気にかける」のあり群はどちらもなし群に比べて家での休息感が有意に高い傾向であった。

２）家族に対する居場所感

(1)性別と家族からの一貫した関わりを要因とした２要因分散分析

家族に対する居場所感について，性別（男・女）と家族からの一貫した関わり（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 10-1に示す。

交互作用は，どの内容においても見られなかった。

どの内容においても，性別の主効果が有意であり（それぞれF(1, 395)＝4.32，p<.05；F(1, 395)＝8.91，p<.01；F(1, 394)＝5.42，p<.05；F(1, 395)＝7.37，p<.01），女子の方が男子より家族に対する居場所感が高かった。

Table 9-1　性別と家族からの一貫した関わり別の家での休息感の平均値と２要因分散分析結果

		男				女				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
家族からの一貫した関わり	一緒に食事をする	15.49（4.25）	156	15.54（4.54）	69	16.05（3.98）	147	15.72（4.69）	39	.57,	.09,	.15
	話しかける	15.95（4.10）	156	14.51（4.70）	69	15.93（4.13）	153	16.21（4.16）	33	2.78+,	1.32,	2.87+
	あいさつをする	15.91（4.04）	149	14.69（4.81）	75	16.05（4.19）	146	15.58（3.97）	40	1.13,	3.10+,	.59
	様子を気にかける	15.92（4.31）	116	15.06（4.35）	108	16.08（4.19）	130	15.68（4.01）	57	.81,	2.07,	.28

数値は家での休息感の平均値（SD）を示す
F値は，性別，一貫した関わり，交互作用の順に示す
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 9-2　会話量と家族からの一貫した関わり別の家での休息感の平均値と２要因分散分析結果

		会話量（多）				会話量（少）				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
家族からの一貫した関わり	一緒に食事をする	15.88（4.12）	268	15.35（4.77）	48	14.56（4.46）	36	15.80（4.45）	60	.62,	.41,	2.50
	話しかける	15.98（4.17）	283	14.33（4.42）	33	15.58（3.44）	26	15.24（4.81）	70	.17,	2.48,	1.09
	あいさつをする	15.98（4.16）	261	14.91（4.44）	54	16.00（3.73）	34	14.90（4.83）	62	.00,	3.80+,	.00
	様子を気にかける	15.97（4.28）	221	15.41（4.08）	94	16.36（3.88）	25	14.93（4.61）	72	.01,	3.12+,	.61

数値は家での休息感の平均値（SD）を示す
F値は，会話量，一貫した関わり，交互作用の順に示す
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 10-1　性別と家族からの一貫した関わり別の家族に対する居場所感の平均値と２要因分散分析結果

		男				女				F値		
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n			
家族からの一貫した関わり	一緒に食事をする	67.90（19.00）	153	68.26（19.18）	66	73.80（18.45）	143	71.68（20.69）	37	4.32*,	.16,	.31
	話しかける	69.56（19.02）	153	64.41（18.64）	66	73.09（19.00）	147	74.58（18.63）	33	8.91**,	.64,	2.10
	あいさつをする	69.53（18.62）	146	64.39（19.65）	72	74.17（19.03）	140	69.90（18.70）	40	5.42*,	4.66*	
	様子を気にかける	71.11（17.91）	115	64.33（19.78）	103	73.41（19.56）	124	72.79（17.67）	57	7.37**,	3.49+,	2.42

数値は家族に対する居場所感の平均値（SD）を示す
F値は，性別，一貫した関わり，交互作用の順に示す
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

家族からの一貫した関わりの主効果については,「あいさつをする」で有意であり（F(1, 394)＝4.66, p＜.05),「あいさつをする」のあり群の方がなし群より家族に対する居場所感が有意に高かった。「様子を気にかける」では有意傾向で(F(1, 395)＝3.49, p＜.10),「様子を気にかける」のあり群の方がなし群より家族に対する居場所感が有意に高い傾向であった。

(2)家族に対する居場所感

家族に対する居場所感について，会話量（多・少）と家族からの一貫した関わり（あり・なし）を要因とした２×２の２要因分散分析を行った。その結果をTable 10-2に示す。

「一緒に食事をする」において交互作用が有意であり（F(1, 396)＝4.43, p＜.05),「あいさつをする」では交互作用が有意傾向であった（F(1, 395)＝3.15, p＜.10)。単純主効果の検定の結果,「一緒に食事をする」のあり群では会話量の多い群の方が少ない群より家族に対する居場所感が有意に高かった（p＜.05)。また，会話量の多い群では「あいさつをする」のあり群がなし群に比べて家族に対する居場所感が有意に高かった（p＜.01)。

会話量の主効果は見られなかった。

家族からの一貫した関わりの主効果については,「あいさつをする」と「様子を気にかける」において有意傾向であり（それぞれF(1, 395)＝2.78, p＜.10；F(1, 396)＝3.80, p＜.10),「あいさつをする」のあり群と「様子を気にかける」のあり群がどちらもなし群に比べて家族に対する居場所感が有意に高い傾向であった。

考　察

１．会話の内容と家庭における居場所感との関連について（仮説１）

まず,「雑談・体験の共有」が,「家での休息感」と「家族に対する居場所感」の両方と関連が示された。特に，男子中学生は，家族との雑談や体験の共有により家での休息感，家族に対する居場所感が高まると考えられる結果となった。男子は，中学生になると友だちとの関係がより親密になり，児童期までのように家族に何でも話すことや家族から過剰に干渉されることに抵抗を感じやすくなるのではないだろうか。そのため女子以上に家族との会話が少なくなる。その一方で家を頼りたい気持ちもあるが，恥ずかしさや自立との葛藤があり，女子のように素直に家族に依存することもできず，依存したい気持ちを抑えて家族から距離をとろうとする分，家族との会話に安らぎを感じ，家での休息感を実感するのであろう。とくに雑談や体験の共有は，プライベートな内容に比べ内面に踏み込まれる心配が少なく，進路相談のように家族からのアドバイスや評価につながる心配も少ない分，男子中学生にとっても気楽に話せる内容であるため,家族との雑談・体験の共有でリラックスでき，家に居心地の良さを感じるのではないだろうか。また，雑談・体験の共有は他の内容に比べて自分のことにあまり触れなくていいため，より話しやすいのかもしれない。大して重要な内容ではないが，それにも関わらずつきあってくれる家族に対して，自分を受け容れてくれているという被受容感や内面には踏み込まずに見守ってくれることへの信頼感につながり，家族に対する居場所感も高まるのではないだろうか。一方，女子中学生は，雑談・体験の共有のなし群において男子より家での休息感が高かったことから，家族に対してより依存的であり，関係も親密であるため，雑談や体験の共有がなくても，ある程度家での休息感，家族に対する居場所感を感じているのではないだろうか。

そして,「プライベートな内容」,「近況報告」,「趣味」については,「家での休息感」との関連が示された。

プライベートな内容を家族と話す子どもは，家での休息感が高い傾向があることが示唆された。日頃，友だちにも言えずに抱えている悩みや不安を家族に吐き出すことができることが，人間関係などによるストレ

Table 10-2　会話量と家族からの一貫した関わり別の家族に対する居場所感の平均値と２要因分散分析結果

		会話量（多）				会話量（少）				F値
		あり	n	なし	n	あり	n	なし	n	
家族からの一貫した関わり	一緒に食事をする	71.45（19.15）	262	67.41（20.77）	46	64.43（17.06）	35	71.16（18.82）	57	.41, .28, 4.43*
	話しかける	71.64（19.40）	276	64.06（18.53）	32	67.29（14.38）	24	69.06（19.67）	68	.01, 1.01, 2.62
	あいさつをする	72.28（19.11）	254	63.55（19.87）	53	68.03（17.27）	32	68.30（19.19）	60	.01, 2.78+, 3.15+
	様子を気にかける	72.35（19.24）	215	67.14（19.63）	92	71.92（14.35）	24	67.13（19.57）	69	.01, 3.80+, .01

数値は家族に対する居場所感の平均値（SD）を示す
F値は，会話量，一貫した関わり，交互作用の順に示す
+p＜.10 *p＜.05 **p＜. 01 ***p＜.001

スを抱えた子どもの心を癒すと考えられる。近況報告については，自分の予定やその日の体験などを報告することによって，家での休息感は高まることが示唆された。自分が体験したこと，これからしようと思っていることを家族に伝えることは，家族と予定を共有することである。家族に近況を気にかけてもらえることへの安心感が家での居心地の良さにつながり，家での休息感につながると考えられる。趣味については，特に男子中学生で家族と趣味に関する話をすると家での休息感が高まることが示唆された。趣味に関する話は雑談と同じように気楽に話せる内容である。また，自分の興味や関心について家族と話すことで，家族との距離が縮まったように感じ，家での居心地がよくなるのであろう。

「進路相談」は，「家での休息感」，「家族に対する居場所感」のどちらとも関連は示されなかった。進路相談は子どもの将来やアイデンティティに関わる重要な内容であるが，子どもにとってプレッシャーを感じる話題でもある。話せることが居場所感につながる者もいれば，そういう話題が家庭内で出ないことが居場所感につながっている者もいることから，関連がみられなかったのではないかと推察するが，今後さらに検討が必要である。

以上，仮説１について，仮説１-(2)「悩みや不安など，自分が抱えている気持ちを家族に話している子どもは，家庭における居場所感が高い。」が支持され，仮説１-(1)「友達とのエピソードや自分の興味・関心があるものについて家族と話す子どもは家庭における居場所感が高い。」は男子中学生において支持されたと言えよう。

２．家族からの一貫した関わりと家庭における居場所感との関連（仮説２）

「あいさつをする」「様子を気にかける」については，「家での休息感」と「家族に対する居場所感」の両方に関連が示された。

まず，「あいさつをする」について，「家での休息感」では，家族とあいさつを交わすことで，子どもの家での休息感は高くなることが推察された。したがって，家族とのあいさつは，会話量に関係なく，中学生の家での休息感を高めると考えられる。家族とあいさつを交わすことで，中学生は自分の存在や家には自分の居場所があることを実感し，居心地の良さや休息感につながると言えよう。また，家族との会話が多い子どもは，家族とあいさつを交わすことで家族に対する居場所感が高くなるという結果がえられた。このことから，家族との会話の多い中学生にとって，あいさつは重要なコミュニケーションであると考えられる。あいさつは肯定的でも否定的でもないコミュニケーションであるため，あいさつを交わすことで，家族に無条件に受け入れられているという感覚が高まるのではないだろうか。

「様子を気にかける」については，「家での休息感」と「家族に対する居場所感」の両方に関連が示され，家族から様子を気にかけてもらうことで，会話量に関係なく中学生の家での休息感，家族に対する居場所感を高まるという結果であった。このことから，家族が関心を向けていることや，見守っていることを示すコミュニケーションが中学生の家庭における居場所感につながると考えられる。「話しかける」では，「家族に対する居場所感」との関連は示されなかったことから，一方的に関心を向けるのではなく，家族が子どもの行動や態度から子どもの変化や気持ちに気づき，応答を示すことが特に重要であることが推察される。子どもからのサインを見逃さずに応答することで，家族から分かってもらえたという安心感や被受容感，家族への信頼感につながるのではないだろうか。

「一緒に食事をする」については，「家族に対する居場所感」との関連がみられ，家族と一緒に食事をする子どもは，家族との会話が多いと家族に対する居場所感が高いことが示された。音山（2009）が親と一緒に食事をとることが，親子間のコミュニケーションの場として機能している可能性があると述べているように，普段から家族との会話が多い子どもにとっては，家族との食事場面はコミュニケーションの場となり，家族に対する居場所感につながると考えられる。しかし，普段から家族との会話が少ない子どもにとっては，食事場面もコミュニケーションの場にはならず，むしろ居心地が悪く感じてしまい，家族に対する居場所感は低くなるのではないだろうか。したがって，家族と一緒に話しながら食事をすることで，家族に対する居場所感は高まると考えられる。

「話しかける」については，「家での休息感」との関連がみられ，男子中学生は女子中学生より家族から話しかけられることで家での休息感が高くなるという結果であった。この結果は，会話の内容と家庭における居場所感との関連の結果と一致するものであり，男子中学生にとって，家が休息の場となるためには家族との会話が重要な要因となる可能性がある。自分からは話しかけることができなくても，本当は家族と話した

いと感じている男子中学生の気持ちを理解し，家族から歩み寄ることが大切であると言えよう。

以上より，仮説２「家族からの一貫した関わりがある子どもは,家庭における居場所感が高い。」について，支持されたと言えるだろう。

まとめと今後の展望

本研究では，中学生の家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連について，会話の内容及び家族からの一貫した関わりに着目して検討した。調査の結果，会話の内容及び家族からの一貫した関わりは，家庭における居場所感との関連が示されたことから，コミュニケーションのあり方が，家庭における居場所感につながる要因であることが示唆された。

まず，会話の内容と家庭における居場所感との関連について,「プライベートな内容」,「雑談・体験の共有」,「近況報告」,「趣味」と「家での休息感」との関連が示された。プライベートな内容と近況報告は中学生の家での休息感を高め，男子中学生にとっては，雑談や体験の共有，趣味に関する話も家での休息感を高める要因となることが示唆された。しかし,「雑談・体験の共有」以外は,「家族への居場所感」との関連は示されず，このことから，会話の内容は家が子どもにとって居心地が良く，帰りたい場所となるために重要な要因であるが，家族から受け容れられている感覚や，家族への信頼感にはつながらないことが推察される。家族に対する居場所感には家族から受け容れてもらえる体験や家族を信頼できる体験が必要となるため，家族からの一貫した関わりや，コミュニケーション態度など他の要因の影響が重要となるのであろう。

次に，家族からの一貫した関わりと家庭における居場所感との関連について，家族からの一貫した関わりがあることによって，家庭における居場所感は高まると考えられる。

家族と一緒に食事をすることが家族に対する居場所感につながるためには，食事場面での家族との会話が重要であると推察される。また，家族から話しかけられることは，男子中学生にとって家での休息感を高める要因となることが示唆された。さらに，あいさつは会話量（日常の全体的な会話の多さ）に関係なく中学生の家での休息感を高めること，会話量の多い子どもの家族に対する居場所感を高めることが示唆され，重要なコミュニケーションであると考えられる。そして，家族が様子を気にかけてくれることは，会話量に関係なく中学生の家での休息感，家族に対する居場所感を高めることが示唆された。これらのことから，家族との会話量が減少する思春期においても，家族が積極的に子どもへの関心を示し，見守り続けることが中学生の家庭における居場所感につながると言えよう。

以上の結果から，家族とのコミュニケーションが減少する思春期においても，コミュニケーションのあり方によって，中学生の家庭における居場所感を高めることが可能であると言えよう。とくに，家族から積極的に関心を向けてもらえることが中学生の家庭における居場所感につながると考えられる。一方的に干渉するのではなく，まずは子どもの気持ちを聴くことや，子どもの様子を見守ることが大切であり，子どもが必要とする時にその気持ちに答えること，困った時に相談できる関係を作っておくことが思春期の家族関係に求められる。

今回，家族との会話量を考慮した結果，家族との会話量が少ない中学生の特徴として，家族のコミュニケーションをネガティブに捉えやすいということが推察された。そのことが家庭における居場所感を低める要因にもなっていると考えられる。したがって，家族との会話量が少ない子どもに焦点をあてた研究によりその家族関係の特徴を明らかにし，どのようなアプローチができるかを検討することも今後の課題となるだろう。

文　献

青木省三（1996）　思春期こころのいる場所―精神科外来から見えるもの　岩波書店

平木典子・中釜洋子（2006）　ライブラリ　実践のための心理学＝３　家族の心理－家族への理解を深めるために－　サイエンス社　１章Pp2-4

村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文（2000）　居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ－通所型中間施設の持つ治療・成長促進的要因－心理臨床学研究，18，221-232

中島喜代子（2003）　中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」　三重大学教育学部研究紀要（人文・社会科学），54，125-136

中村泰子（1998a）居場所イメージに関する検討－連想語の調査を通して－　日本心理学会第62回大会発表論文集，138

中村泰子（1998b）居場所イメージの発達的変化－○△□法の基礎的研究として－　大阪市立大学生活科学部児童・家族相談所紀要，15，45-22

中村泰子（1999）「居場所がある」と「居場所がない」との比較　－○△□法の基礎的研究として－児童・家族相談所紀要，16，13-22
則定百合子（2008）　青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究　神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文（未公刊）
小野田瑠璃・吉岡和子（2014）家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響－自己肯定感と友人に対する「甘え」との関連に注目して－　福岡県立大学心理臨床研究，６，75-84
音山若穂（2009）　居場所と心理的ストレス家庭に関する基礎的研究－中学生の居場所に関連する要因の分析－　郡山女子大学紀要，45，123-145
佐治守夫・岡村達也・加藤美智子・八巻甲一（1995）思春期の心理臨床　学校現場に学ぶ「居場所」つくり　日本評論社
杉本希映・庄司一子（2006）　「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化　教育心理学研究，54，289-299
住田正樹・南博文（編）（2003）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会
多川則子・吉田俊和（2006）　日常的コミュニケーション尺度　心理学尺度集Ⅴ　堀洋道　監　吉田富二雄　宮本聡介　編　サイエンス社　Pp.266-271
田中理絵（2003）　青年期と「居場所」　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会　Pp.203-228
富永幹人・北山修（2001）　青年期の居場所：青年期の精神発達の観点から―　住田正樹　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　平成10年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究（A）　(1)研究成果報告書，179-191（則定百合子（2008）「青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究　神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文（未公刊）」より）
富永幹人・北山修（2003）　青年期と「居場所」　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会　Pp.381-400

付　記

本論文は，2014年度に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

アンケートに協力してくださった中学校の生徒の皆様，真剣にアンケートに取り組んでいただき，ありがとうございました。そして，蔵田一秀校長先生，久津摩泰子先生にはアンケート実施のお願いに快諾していただきましたこと，心から感謝申し上げます。